



洋書輸入協会会報

Vol. 28 No. 2 (通巻321号) 1994年2月

新年懇親会

JBIAの1994年新年賀詞交換会が1月6日(木)午後6時から東京新宿ホテルセンチュリー・ハイアット桃山の間で開催された。

81社、238名(招待者4名)が出席。

文化厚生委員長の開会の辞、鶴副委員長(東亜ブック社長)の司会で進められた。

恒例により先づ海老原理事長(丸善会長)のご挨拶。ついで松原社長(紀伊國屋書店)のご挨拶と乾杯の音頭でご出席各社の幸多き1年を祈念して乾杯。

海老原理事長のご挨拶

松原社長のご挨拶

<要旨は別紙の通り>

続いて海老原理事長、松原社長、亀井社長(三省堂)、山川会長(ユサコ)の業界大先輩の4氏が新装のハッピーをめし、不況色一掃の思いを込めて鏡開きを行い歓談に入る。

不況、円高、コストアップ、消費税、更にまた外資系企業の直販、外資企業との過当競争、電子ハイテク技術

による国際的ロジスティックスの展開、取次の洋書ストックリストへの参画等々我が業界は幾多の問題に直面している。

特に後者は本質的且つ徹底的な議論とコンセンサスが求められる。

それには品格と礼節な態度が肝要であることはいうまでもない。世界の流れを見据えて国際的視点に立って早急な対策が必要であろう。

変化は既得権益を打破し痛みを伴うことは歴史の証するところ。将来展望を模索し、ビジョンを示してこの痛みを柔らげ、分かち合うことこそ協会のレゾナントであり、責務であろう。

定刻7時40分渡辺副委員長(洋販、社長)の閉会のご挨拶と3本で閉会した。

今年は会場もゆったり、和洋折衷料理もたっぶり、大変好評。また新機軸と予算との板挟みで知恵を出しあったホテルセンチュリー・ハイアット、並びに文化厚生委員会の皆様に厚くお礼申し上げたい。

(文化厚生委員長 吉本記)

新年懇親会	1	理事会報告	4	東京の坂と橋と文明開化(42)	6
お知らせ	3	海外ニュース	5	主要国際書籍展一覧	7
うちの会社	4	文化厚生委員会だより	5	広告	8

海老原理事長ご挨拶

年頭のご挨拶として会報1月号のための原稿をここに用意したが、たいへん格調高いものの漢字ばかりで堅苦しいので、ここでは率直に思うところを述べたい。

漢字と言えば、賀詞交換会の看板に「平成六年」とある。洋書を扱う業界の集いには「1994年」が相応しいのではないか。

昨年は景気低迷下、皇太子ご成婚を機に上向きを期待したが外れた。又、様々な景気浮揚策が論議されたが何一つ決まらなかった。

ガット・ウルグアイラウンドの決着後、世はコメの自由化をめぐる紛糾しているが、思えば「洋書」という昔に自由化されており、業界あげて様々な困難を克服しつつ懸命に取り組んできた歴史がある。但し、その歴

史を通じてわが洋書業界は貧乏慣れしてしまっている感がある。この体質から抜け出そうではないか。

今\$=¥110台を推移しているが、今年中に\$=¥80台になると大胆に予想する人もいる。仮にこのような状況になったとすると、コストの吸収が困難になりドルで給料を払わざるをえない事態を迎えるかもしれない。

円高に加えて外資系業者の価格攻勢に直面し、一時はJBIAを脱会して独自に対応せざるを得ないと思いつめたものの、辛うじて思い止まったこともある。

過去難しい局面をなんとか凌いできた経験を活かして業界が知恵を絞り、結束して頑張って戴きたい。

以上

紀伊國屋書店 松原社長ご挨拶

明けましておめでとうございます。

皆様と共に本年は世界平和がより確実なものになり天変地異・人災がなく平穏な発展の年であることを祈りたいと存じます。

昨年は戦後最大の不況で恐らくマイナス成長になるものと思われまふ。わが洋書輸入業界におきましても円高により再三値下げを行い売価の低下により売上の上昇が望めず後半洋雑誌の受注におきましては海外業者に大きくシェアを奪われました上、価格競争が激化して殆ど利益なき有様、まことに多事多難でありました。

本年は前半は120円を超える円安に後半は100円に近づく円高と予想されます。海外業者との競合も激化し決して平穏ではあり得ないと思われまふ。お互い更なる協調の下に共存を図らねばと存じます。

本日の設営の労をとられた文化厚生委員会の皆様に衷心よりお礼を申し上げます。

ではご来会の皆様のご健勝、またお仕事のご発展を祈念して乾杯いたします。

ご唱和ねがいます。



今年は淑女たちのお出迎いで和やか



会長の挨拶も滑らかに響く会場



毎年の行事にしたい鏡開き



年末にはもっとおいしい祝杯を

(写真・会報委員会提供)

お知らせ

下記の3社が組織変更により REED-ELSVIER グループの傘下となり1994年2月1日よりエルゼビアサイエンスジャパンがプロモーションを行う旨連絡がありましたのでお知らせします。

この結果、1993年12月号でお知らせのパーガモン プレス ジャパン（賛助会員）は12月末日付、バターワース出版社（賛助会員）は1月末日を以て退会しました。

BUTTERWORTH-HEINEMANN

BOWKER-SAUR

BUTTERWORTH & CO (Legal)

日本橋郵便局の郵便振替口座の変更

来る1994年5月1日より当洋書輸入協会の郵便振替口座番号が下記の通り変更になりますのでお知らせします。

新たな口座番号 00160-2-90177

オリンピックが東京で開催された頃に創業して、昨秋でちょうど満30年となった。当初はファッション関係のパーセンテージが高かったが、徐々にグラフィック、インテリア、写真などデザイン一般に比重を移し、現在はファッション関連の商品は1割弱となっている。

最近の構造的不況といわれる状況の中で、広告業界の顧客のニーズにも変化の兆しが見えている。従来かなりまとまった数で売れていた定番商品、たとえば著名アニュアル等の売れ行きが、目にみえて減少している。個々の顧客の目が肥えて来て、購入に当たってより慎重に個性的な選択をするようになってきた為か、「多タイトル、少部数販売」という売側にとってはよりうまみの少ない方向に向っているようである。

一般的にパツとしないデザイン分野の書籍のなかで、唯一活発な動きのみられるのが、Mac 関連のニューメディア商品である。

ポスターのイラストもレタリングも、いまや職人的手仕事の世界から Mac のパネル上の操作によって自

在に創作される時代になった。国内のデザインスタジオに於ける Mac のハードの普及率は、既に半ば程度に達しているのではないだろうか。

当社が、永年総代理店として取り扱ってきたアメリカのダイナミック・グラフィック社の著名な版權付カット集も、近年殆どコンピューター対応の商品構成へと移行している。先ごろはカリフォルニアのデザイン集団、エミグレ社の版權を得て、欧文書体集「Emigre font Book 2」を発行し、併せて所載の書体のフロッピーの販売も行っている。コンピューターについては全くの素人ばかりで、まさに「紺屋の白袴」さながらにオタオタと対応している状態である。

創業30年と言っても、同時に「会社の寿命は30年」と良く耳にする言葉もあるし、そうそう喜んでばかりは居られない。マンネリ化を排し、出版を含めて自社独自の商品開発に一層力を入れて行かなければ、と考えている。

理事会報告

1月24日(月)

(一) 12月分収支報告

1月13日(木)付、総務委員会で審議の総務委員長の報告を承認した。

(二) 東京国際ブックフェア (TIBF) 94

1月27日より開催の東京国際ブックフェアで JBIA として行うパネルディスカッションのレジメが報告され、併せて当フェアでのテーブルカットは三笠宮殿下を中心に行われ、当協会の海老原理事長も一緒に参加することが報告された。

(三) 諸規定改正案

総務委員会で改定案を審議し答申案として提出された事務局職員規定、会費規定および弔意金、見舞金等の規定3案について、総務委員長より説明があり承認した。

(四) 選挙管理委員会

本年度開催される定時総会に於ける選挙管理委員会の編成について討議がなされ、委員長を(株)トッパンの関野社長に依頼することとし、次回の総務委員会で委員の候補を決めることとした。

(五) その他

I バタワース社(賛助会員)より、退会の申し出があり1993年12月末日付退会を承認した。

II 洋販(株)柴山氏は理事代理を同社の大倉専務と交代したことが報告された。

III 雑誌 NM 委員長より、委員会報告があり、今後の当委員会には、議題により委員外の会員の参加も随時認めて行きたいとのことで、了承した。

混乱が続く Luchterhand Literaturverlag の行方

ドイツの伝統的な文芸出版社 Luchterhand Literaturverlag は、'94年春の新刊案内が出せないという苦境に立たされる。同社の広報担当者 W. ブリュンメル氏は、“ひどい年” となってしまった'93年を終えて、今年は経営の建て直しに集中すると説明しているが、はたして破産の脅威とあちらこちらで囁かれている同社の終焉を避けることができるかは疑問である。

出版物そのものは非常に高く評価されているのに売り上げが不振、という事態が Luchterhand の悩みだが、予定では7月に次の新刊案内を出すことになっている。同社の看板作家ともいえるペーター・ヘルトリング、クリスタ・ヴォルフ、エルンスト・ヤンドルの著作権が売りに出されていることについてはブリュンメル氏は反駁しているが、すでに刊行が決まっているヴォルフのエッセイや小品を集めた新著の出版については目処が立っていない。

また、主要な作家の著作権ばかりか出版社全体の権利そのものがミュンヘンの Piper 社かケルンにある Kiepenheuer & Witsch 社に買い取られるという噂もあり、両社ともその話をあえて否定していない。

すでに以前から、多くの作家たちの著作権が他社へ移っており、最もセンセーショナルだったギュンター・グラスの Steidl 社への鞍替えをはじめとし、ガブリエレ・ボーマンやゲルハルト・ケプフも Piper へ移っている。

Luchterhand から作品を出版している作家達は、同社の支払いが常に遅れ、甚だしい場合は強制執行か公衆に訴えるという脅迫を用いないかぎり報酬を受け取れなかったと話している。また、30年来同社と密接な関係にあったギュンター・ヘアブルガーもハンブルクにある同社から何の説明もないことに当惑している。

—Börsenblatt '93年12月第3週号より抜粋—

*懸案となっていた Ch. ヴォルフの新著“Aul dem Weg nach Tabou”はこの春ケルンの Kiepenheuer & Witsch からの刊行が決定した。

(Börsenblatt '94年1月14日号)

文化厚生委員会だより

第28回麻雀大会

1993年12月8日(火) 於：凱旋門 参加者 28名

「記録は破られるためにある」と言われるが、前回、紀伊國屋の湊さんが+108の3桁スコアで優勝した時は、この記録は当分破られないだろうと思った。ところが、今回あっさりと東亜ブックの白井さんが+128の大勝を納めた。その上、驚いたことに、たった1回45分で、+91である。阿佐田哲也の名作麻雀小説に「東一局五十二本場」というのがあるが、それほどまではないにしても、ほとんど制限時間内は、親のまんまで上がり続けていたと後で聞いた。3回戦で少し気を抜いたのか-7と負けているが、これが無ければとんでもない大勝記録となっていたろう。

2位は、同じく東亜ブックの鶴竜次君。東スポ流に大

見出しを付けければ、“東亜軍団ワンツーフィニッシュ!!”となる。

3位は、同点でタトルの雨宮さん。同点で何故3位か？ 誠に申し訳ないが、理由は不明。多分大見出しを付けたかったためでしょう。雨宮さんごめんなさい。今度同じことが起きたら厳正にPKジャンケンで決めます。いずれにしろ、東亜ブックは、他にも7位に内田さん、8位に森田さんと上位独占。やっぱり強い軍団です。

というわけで、今回はその他の会社の方の出番なです。次回は、3月16日の予定です。軍団打倒に頑張ります。ちなみに今回は、私は、ブービーでした。

(E A記)

本郷界隈の坂 [13]

菊坂と菊富士ホテル (10)

丸善・本の図書館 鈴木陽二

◆ ブランデンと日本の英文学研究

「・・日本は、戦前にも戦後にも、最も優れた外人教師であり、かつこの国の自然を好み、また国民の長所を認めて、いかなる時にも信頼し続け、献身的な愛情を詩文にも行動にも表した親友の長逝を悼み・・」。1974年、イギリスの誇る詩人ブランデンの逝去に捧げた斎藤勇博士の追悼の一節であった（『英語青年』誌上）。

ブランデン (Edmund Charles Blunden 1896-1974) は、東京帝国大学文学部主任教授の市河三喜から、英文学教師招聘の交渉を依頼された当時留学中だった斎藤勲教授の推薦で、大正13年(1924)に赴任した。詩人としての業績は、既にJ. メースフィールドやA. E. ハウスマンなどの称賛を得ていた27歳の青年詩人であった。そして、昭和2年(1917)に離日するまで日本の英文学の発展と研究者の育成にきわめて大きな貢献をした。同じ頃に、ジョージアン・ボエットとしてその令名をはせていたホジソン (Ralph Hodgson 1871-1962) は東北帝国大学に赴任して英文学の教鞭を執ったが、同時期に二人の優れたイギリス詩人を迎えたことは、日本の英文学研究にとって非常な僥幸であったといわれている。

さて、ブランデンは第1次世界大戦従軍時の従卒ともなつて来日し、ひとまず市河三喜の敷地内の家に落ち着いたが、従卒の帰国した大正14年に菊富士ホテルに移住した。ホテルでの彼の様子は、近藤富枝女史『本郷菊富士ホテル』に紹介されているし、また同じ時期にホテルに止宿していた広津和郎の『年月のあしおと』や、ブランデンの生徒であった上林暁の『菊坂二丁目』などで窺うことができる。また、上林は師から贈られた詩集を題材にして創作した小説『ジョン・クレアの詩集』で、日本でのブランデンの姿を詳しく描き出している。ブランデンは、第1次世界大戦で従軍したおりにフランス戦線で読んだジョン・クレア (John Clare, 1793-1864) の詩集に感激して、この忘れ去られた英国の田園詩人を再び世に出し、その研究で成果を挙げた。この詩人をこよなく愛し、片時も手放さずに愛読した『田園美神』が上林に贈られた詩集で、おびただしい書き込みと背皮がボロボロになった本であったという。

帝国大学でのブランデンは、学生と幾つも違わない若い教師として「積極的に学生に親しみ学生の知能を啓発しようとする態度をとった」と太田三郎氏は解説しているが（講談社『日本現代文学全集』第15巻の解説）、十分な準備をし、プリントまで配布して行った授業は学生の評判がよく、影響力は非常に大きかった。日本にメルヴィルの『白鯨（モービー・ディック）』を初めて紹介したのはブランデンで、『カラマーゾフの兄弟』に匹敵する名作と激賞し、『嵐が丘』と並んで英文小説の二大傑作のひとつであると高評した。後年、この教えに触発されて阿部知二の名訳が生まれたことを斎藤博士が述べているが、彼の講義を通じてどんなに多くの優れた英文学者が育っていったのか計り知れない。

また、健筆家であったブランデンは『英文学研究』などの雑誌に盛んに寄稿したが、日本における1920年代-30年代の英文学研究の進歩を跡づけるのには、彼の論文を必ず繙くべきであると斎藤博士が称えているほど、その研究は日本の英文学の深耕に資することが大きかった。さらに、東京で書いた散文著作も多く、1924年(大正13)に執筆の第1次大戦における西部戦線での体験を綴ったエッセー『大戦微韻』(Undertones of War) は戦争文学の傑作といわれた。日本が好きで、戦後、英国の文化使節として来日したことも含めて度々日本を訪れた彼は、日本を詠んだ詩も170~180篇に及ぶという。英国ケント州に住んでいた幼少の頃、近隣の住人が小高い所に彼を登らせて「日本を見なさい」「富士山を見なさい」と言ったその遠い記憶が短詩“Looking Eastward”に結晶したように、日本を愛する心は終生変わることはなかった。日本における英文学の進歩に尽くした彼の貢献を称して、日本学士院は昭和25年に名誉会員に推挙し、また日本政府は昭和39年に勲三等旭日賞を贈呈した。

このような功績を残してブランデンは昭和2年に菊富士ホテルを去るのであるが、広津和郎が「内地雑居時代を思わせるような一種のエキゾチズムを感じさせた」菊富士ホテルも、この頃から次々と外人が退去するようになりその雰囲気は消えて行く。外国人が住みにくくなる時代が忍び寄ってきた日本であった。

主要国際書籍展一覧

書籍展名	開催日	開催地	連絡先 FAX
MILTA	1/15-1/18	Cannes	3 5317 5420
TOKYO INTERNATIONAL BOOK FAIR	1/27-1/30	Makuhari	3 3345 7929
JERUSALEM INTERNATIONAL BOOK FAIR	3/12-3/17	Jerusalem	010 972 2 243144
LIBER '94 MADRID	3/16-2/19	Madrid	101 34 1 345 4351
LEIPZIG BOOK FAIR	3/17-3/20	Leipzig	0341 2234207
SALON DU LIVRE, PARIS	3/18-3/23	Paris	100 331 49532788
LONDON INTERNATIONAL BOOK FAIR	3/20-3/22	London	081 948 9930
BOLOGNA CHILDREN'S BOOK FAIR	4/7 -4/10	Bologna	010 39 51 282332
WARSAW INTERNATIONAL BOOK FAIR	5/18-5/23	Warsaw	022 266240
TURIN BOOK FAIR	5/19-5/24	Turin	011 248 1007
AMERICAN BOOKSELLERS ASSOCIATION CONVENTION & TRADE EXHIBIT	5/28-5/31	LosAngels	914 631 8391
SPECIAL LIBRARIES ASSOCIATION EXHIBIT	6/12-6/15	Atlanta	202 265 9317
AMERICAN LIBRARY ASSOCIATION ANNUAL CONFERENCE EXHIBIT	6/23-6/30	Miami	312 280 3255
SINGAPORE INTERNATIONAL FESTIVAL OF BOOK AND BOOK FAIR	9/3 -9/11	Singapore	010 65 344 0180
FRANKFURT BOOK FAIR	10/5 -10/10	Frankfurt	069 2102227

The New England Journal of Medicine

The most cited Medical Journal — Direct to you.

180年間にわたり発行を続けている本誌は、世界で最も高く評価されている医学情報源の一つであり、広く好評を博している。毎週、本誌の編集者が厳格に精選した記事は、多忙な医師の方々にとってすぐに役立ち、容易に理解できる形式で報告・発表されている。

世界各国で23万人もの医師が本誌を購読しており、世界の医学の進歩に遅れないための、最も信頼でき権威ある情報源となっている。

**This is what you receive each week
when you subscribe to the *Journal*.**

Original Articles

疾患の原因や治療についての臨床的研究を中心としたオリジナルの解説記事。

Review Articles

医学の進歩、薬物療法、疾患の最新の概念・メカニズム、医学セミナーに関する実践的な報告は、大きな進歩や話題となっている問題の専門的な概要を提供する。

Case Records from the

Massachusetts General Hospital

診断技術を磨く上で役立つ実際の課題。

Editorials

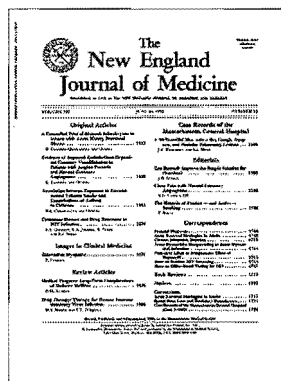
重要な研究、臨床上的の問題や政治的問題に関する鋭い解説。

Correspondence

読者、寄稿者、編集者間で活発に続いている世界的な対話。

Special Articles

医学の社会的、経済的、政治的、倫理的に重要な内容に関するタイムリーな論評。



- 1994年 (Vol.330-331) 週刊
- 年間購読価 (税抜き)
- 一般 ¥26,500 レジデント・学生 ¥17,200
- 専用バインダー<1年分>¥7,600

CD-ROM版も扱っております。

詳細は南江堂洋書部までお問い合わせください。

日本総代理店 (株) 南江堂洋書部



〒113 東京都文京区本郷3-42-6 ☎(03) 3811-9950

1994年2月 通巻第321号 洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所—藤本綜合印刷株式会社